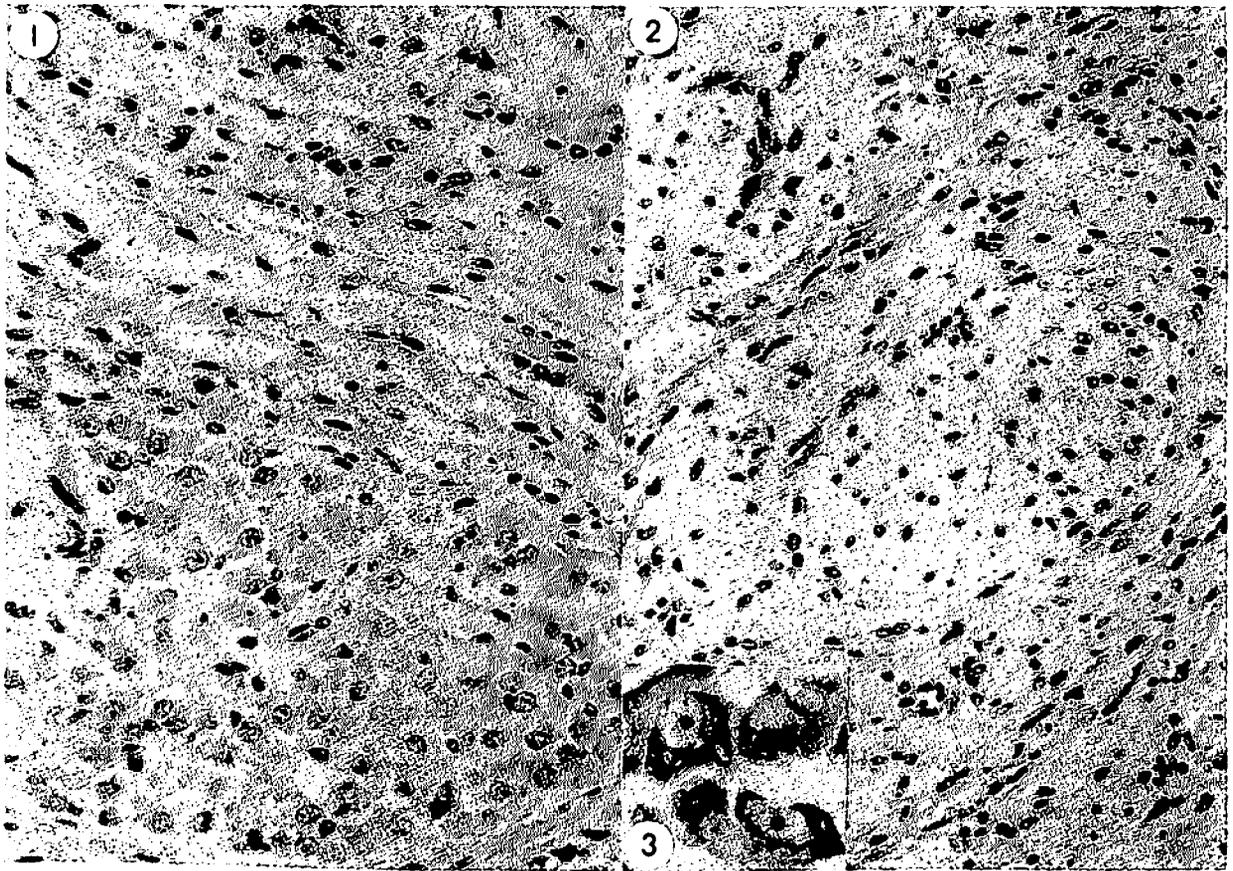


豚の空回腸壁神経叢を原発とする分化型神経節腫

麻布大学獣医学部病理学教室・横浜市食肉衛検出題 第22回獣医病理学研修会標本No.371



動物：豚 (Landrace)、雌、成豚、秋田県産。

臨床所見：生体検査時には、著変を認めなかった。

肉眼所見：病変は漿膜面から、大小2ヶの膨隆部として認められた。大きな膨隆部は、7.5×5.0×4.5cmの腫瘤が、あたかも鶏卵が、腸管に詰ったような形で存在した。小さな膨隆部は、長さ3cmにわたって、腸管の一部が、肥厚しており、切開すると、粘膜面に3×2cmの円盤状の腫瘤が形成されていた。この腫瘤部は、粘膜伸張し、襞は消失していたが、出血、壊死等はなく、その前後の粘膜には、肉眼的異常は認められなかった。

2つの病変は、かなりはなれて、ともに腸管の側壁(腸間膜附着部側面)に偏在し、乳白色、充実性で、出血、壊死は認められなかった。

組織学的所見：腫瘍は、主に粘膜下織に存在したが、一部、粘膜筋板を越え、絨毛内に侵入し、内輪走筋間にも島状に増殖していた。

腫瘍組織は、塊状に増殖する大型細胞群(写真1、下半)とそれを囲む線維成分(写真2)よりなっていた。腫瘍細胞は、非常に大きく、不整形で、弱塩基性の豊富な細胞質をもち、円形の核は、淡明で、通常、1ヶの明

瞭な核小体をもち、このような細胞の周囲には、ときおり、クロマチンに富む核をもつ小型の細胞が散見された。これら大型細胞は、形態並びにその染色性が、神経節細胞に酷似しており、細胞質にcresyl violetで染色されるNissl物質を認めた。(写真3)

粘膜下織に、多く認めた線維中には、明らかな神経線維束や紡錘形の核を有するSchwann細胞様の細胞が、多数認められ、Bodian染色によって、黒く染め出される神経線維様物もあった。また、健常部との境界には、神経節細胞と線維とが混在し、正常神経節を思わせる像が見された。

粘膜固有層と筋層の腫瘍組織には、線維成分は乏しく粘膜下織の腫瘍細胞より小型で円形核をもつ細胞が、島状に増殖しており、これらの細胞質にも、Nissl物質を認めた。

病理学的診断：以上の所見より、空回腸壁神経叢を原発とする分化型神経節腫Ganglioneuromaと診断した。

なお、二つの腫瘍は、離れて存在していたこと、この腫瘍が良性であることなどから、各々、独立して多発性に、発生したものと考えられる。